

『輝けるポーラの光』

—空翔ける羊飼いの群れシリーズ 4—

第一章 「会議記事録」

最近、目立って *POWLA* のダウンが増えている。*POWLA* 端末側の問題であれば、まだのんびりと構えているつもりだったんだが、ことが *NFL* に起因するトラブルとなるとそうもいなくなる。早く手を打たなくては、システム全体に影響が出てしまう。

シモさんとは、先週から雑用を全部私に押しつけてロンドンに行ったまま、何の連絡もありません。お陰で私は、局長から室長代理なんぞというありがたくないポストを貰う羽目になって、忙しくてしかたがない。

「くま先輩、そろそろミーティングの時間です。」

必ずと言っていいほど、人の背中に話しかけるのは、明子ちゃんしかいない。

「今日…でしたっけ？」

「今日です。早く行かないと、また *Ryo* 先輩に怒られますよ。」

そうだった…。あまりの *POWLA* システムのトラブルの多さに、最近では対策会議が毎週開かれている。その調整役が元連邦委員長なのだ。どういう経緯である人がここに戻ってきたかは知らないけど、どうも暫くは科学部にいるつもりらしい。

また明子ちゃんも、せっかく地球に休暇に戻ってきたというのに、いつのまにか謹慎中の佛木に代わって対策会議に出席する羽目になっている。しかも、私と同じで室長代理なんぞというありがたくない肩書きを貰ってである。

「室長代理の仕事は、もう慣れました？」

明子ちゃんにそう訊ねてみる。

「ぜんぜん、佛木先輩ったらよくあんな細々としたことまで神経使っていましたねえ。あたしなんか一週間でもうボロボロなんですけど。これが、あと3週間もあるかと思うと憂鬱で…。」

「ま、明子ちゃんなら大丈夫。それより、*Ryo* を待たせるとまたうるさいから、そろそろ行きましょう。」

「はい。」

私は明子ちゃんを連れて6階の会議室へと上がった。ここはクラスAの内容で話し合いがもたれる時にしか使われなかった。つまり、今回の *POWLA* のトラブルが、それだけせば詰まっているということを表していることに他ならない訳だ。

私たちは会議室の入口にあるスロットに自分のIDカードを差し込んだ。ここでは通常のカードリーダーと違って、この会議室を退室するまで自分のIDカードは返却されないようになっている。

「相変わらず、遅れてくる奴らだな。この忙しい俺がだぞ、わざわざECあたりから時間通りに来ているというのにだな…。」

「はいはい、分かりましたよ。また、おごればいいでしょ。まったく、毎週毎週、同じ台詞を繰り返さなくたっていいのに。」

「だったら、遅れてくるんじゃないっていうの。たかが2分くらいしかかかんないんだから。」
まったく Ryo の口の悪さは今に始まったことじゃないが、情報部に移ってから尚一層ひどくなったような気がする。

…いや、たっちゃんが死んでからか。

明子ちゃんはそのような私たちのやり取りを、またいつものごとく笑いを堪えて黙って見ている。

「そろそろ始めたいと思うんだが。」

「あ、はい…。」

連邦委員長…、いや和岐さんの一言で雰囲気ぐっと引き締まる。明子ちゃんはいつの間にかに自分の席に就いていて知らん顔をしているので、私もとりあえず自分の席に座った。

「あれ、ハスラムさんは？」

「今日は遅れてくると連絡が入っている。先に始めていてくれと言っていたから構わないだろう。」
珍しいこともあるもんだ。いつもはどんな所からでもこの会議だけは出席していたのに。何があったのか、ちょっと気になったりする。

「では、本日の会議を始めよう。まずは先週各自に出しておいた課題の結果を報告してほしい。湯浅中尉、いいかな？」

「はい、では、あたしからの報告です。」

明子ちゃんは持ってきたファイルを慌てて開くと、一つ小さく深呼吸をする。

「*POWLA* 端末のここ 1 ヶ月ほどの故障状況ですが、はっきり言いまして、信州局の *POWLA-TWIN* が 178 回で断突の故障回数を示しています。あとはステーションVBの *POWLA* は現在でも復旧の目途が立っていません。」

「*POWLA-TWIN* の故障原因は？」

「178 回中、32 回はオペレーターの操作ミスですが、残りについてはすべて原因不明として処理されています。ここまで原因不明が増加した要因としては、科学部、文化部両室長の不在が上げられます。」

明子ちゃんはそう言って、チラッと私の方を見る。

「シモさんはどこへ何しに行ったんだ？」

「今はたぶんロンドンだと思います。私は何しに行ったのかまでは聞いてませんけどね。」

はっきり言って、それを一番知りたいのはこっちの方だったりする。*POWLA-KNIGHT* の方はシモさんがいなくてもなんとかなるんだけど、室長代理なんて業務まで押しつけられたものだから、雑用が多くて *POWLA-KNIGHT* も全然進まない。

「その 32 回の操作ミスの内、市瀬中尉の絡んだトラブルは何件だ？」

Ryo はファイルも見ずに、明子ちゃんにそう問いかける。

「えーっと、30 回です。残りは坂田局員とあたしが 1 回ずつです。」

「トラブル後の対処は誰がやっているんだ？」

「現在はくま先輩です。他にいませんから。」

「で、トラブル時の対処方法はリセットのみか？」

この質問は私に向けられたもの。いつもこんな風に Ryo の質問に私と明子ちゃんが答えるという形で議事が進むと言っていい。

「そうですね。原因は分かっていますから。ようは *POWLA* のウィークポイントですからねえ、

処理速度の低下は…。」

「なんとかならんのか、こう頻繁に停まられると仕事にならん。」

「だから先週も言ったとおり、*CAPER*A を切り離せば…。」

「証拠が掴めんのだよ。」

はあ…、これでは先週と同じだ。先週もここで話しが停まってしまったんだ。だからお互いに状況を調査し合うと言うことになっていたのに。

「じゃあ、私の方から少し話しをしてもいいかな？」

珍しい…。今まで議論の最中は絶対に口を挟まなかったのに。だいたい、いつも最初と最後しか口を開かなかったのだ。

「ええ…。ええ、どうぞ。」

「昨日、*CATELINA* の機能が約 15 分ほどダウンした。」

「え…？」

私と *Ryo* が同時に和岐さんの顔を見てしまう。明子ちゃんだけが何のことも訳が分からないという顔つきだ。

CATELINA といえば *POWLA* システムのもう一つの中核。データベースである *ANDREA* を制御する役目を持っている。それがダウンしたとなれば、*POWLA* はまったくの白紙状態にあったということになる。

しかし、昨日は私がずーっと *POWLA-TWIN* を独占して操作していたんだが、まったく気がつかなかった。

「それって何時頃の話ですか？」

「正確には昨日の 14 時 27 分だ。」

その時刻なら確実に *POWLA-TWIN* の前にいたはずだ。

「納得がいけないという顔つきだな。」

和岐さんは少し意地悪そうに笑ってみせて、一束の書類を投げてよこす。

「これは…？」

「とりあえず読んでみたまえ。」

Ryo が先にその書類を手にとって読み始める。ほどなくブスツとした表情のまま、書類をこっちに回した。

私と明子ちゃんですれを受け取って、二人で読み始める。

「え…、これは…。」

内容をざっと要約すれば、つまりは *POWLA-TWIN* のマニュアルなのである。しかも、そこには *POWLA-TWIN* に *CATELINA* と同等の機能が搭載されているということが書いてあったのだ。こんな話しは設計者であるシモさんからだって聞いたことがない。

「俺は仕事柄 *POWLA* 関係の書類には全部目を通してているが、*POWLA-TWIN* のマニュアルにはこんなページはないぜ。」

「じゃあ、これは…？」

Ryo が和岐さんに喧嘩を売っているようにも見える。

「このことはたぶん下村室長ただ一人しか知らなかったことだ。当然、私も調べてはみたが、高橋室長の言う通りマニュアルからは削除されている。」

「それじゃあ、この書類は…？」

「ハスラムが調べてきたものだ。つまり、下村室長も私たちがこの件について知っているということとは知らない訳だ。」

一瞬、和岐さんの台詞に一同シーンとなる。

設計者であるシモさんが意図的にマニュアルから削った機能があること。それをいとも簡単に入手してしまふハスラムという人物。どっちにしても背筋がぞっとする。Ryoも同じ気分だろう。

「しかし、どうしてシモ先輩はマニュアルから削除したんでしょうね？」

明子ちゃんがいたって素直な第三者的な質問を投げかける。

「第三者の介入を未然に防止するためだろうね。もともとこの機能は *POWLA-WIN* が持っていたものなんだ。もちろん、*CATELINA* の故障を想定してのものなんだがね。正直言って私も彼がこの機能を *POWLA-TWIN* に搭載してくれてたなんてびっくりしたよ。」

どうも和岐さんの話を総合すると、以前1回だけシモさんにウインダム的设计書を貸したことがあるとのことだった。どうやらシモさんは、その時にこのことを発見したんだろうという話だった。そして、*POWLA-TWIN* に密かに同じ回路を搭載した…。

ん…、ということは、シモさんは当然このことを最初から知っていて新しい *POWLA* の開発に乗り出したことになる。

「和岐さんもシモさんも人が悪すぎる。」

「どうしたんだ？」

事情を把握していない Ryo が不思議そうな顔をする。

「だって、もしこの話しが本当のことなら、*POWLA-KNIGHT* はもう完成したも同然じゃないですか。どうせ今頃はシモさんが新しい衛星を打ち上げていることでしょうよ。」

「どういうことだ？」

「私たちは困らなんでしょう。*POWLA-TWIN* を造ったことのあるシモさんなら *CATELINA* をもう一台造ることなんてそう難しいことじゃないはずだし、*ANDREA* に関してはデータをコピーするだけだし。」

「だが、コピーすると言っても、あの膨大な情報量だぞ。」

「それについても解決済みで、*ANDREA* にはバックアップユニットがあって、そのユニットをそのまま持ってくることであればコピーの必要もないんだ。」

「なんだと、だったらこんなところでこんな会議などやっていないで誰か取りに行った方が…。」

Ryo がそこまで言いかけて、全員がはたと気がついた。

「ハスラムさん…。」

「和岐さん、新しい衛星の名前はなんて言うんですか？」

Ryo は努めて笑顔で和岐さんにそう問いかける。

「さっき下村室長から連絡が入って、新データベース衛星 *AVTASION* の打ち上げが明日と決まったよ。」

悪びれた様子もなく、にっこりと笑う。

「問題はこの件はできるだけ敵に知られたくないんだ。だから今まで通り、業務は *POWLA-TWIN* で行なう。」

和岐さんはきっぱりと言い放った。

「ということはだな…、今後むやみやたらと *POWLA-TWIN* を動かすのはやばいということになる。特にあの市瀬中尉とやらにはな。」

Ryo が明子ちゃんに向かって牽制する。

「でも、いま市瀬中尉をオペレーター業務から外すのはかなり不自然です。もし、どうしても外すということになるなら、それなりの理由がないと…。」

「理由ならなんとでもつければよからうが、とにかく *POWLA-TWIN* をあいつに触らせるんじゃない。」

「そんな、横暴です。」

Ryo から市瀬中尉がカルーンのメンバーらしいという話しは聞いている。カルーンが絡んでいるとなれば、グレン大佐あたりがこっちに来ている可能性がある。

なんとなく、*Ryo* が無理を言っている理由も分かるが、客観的に見て、どう考えても *Ryo* の意見には賛成できない。

「…で、私から一つ提案があるのだが。」

「はい、なんでしょうか？」

和岐さんがまた何かを企んでいるような顔つきで話し始める。

「市瀬中尉については、もう少し泳がせたままにして欲しい。…で、彼女が *POWLA-TWIN* を壊すように協力してやって欲しいんだ。」

「はあ…？」

「つまり、*POWLA* システムを彼女自身の手でダウンして貰うのさ。」

「しかし、壊れるのが *POWLA-TWIN* ならいいですが、もし *NFL* を壊されたらどうするんですか？」

「あるじゃないか。」

「まさか *DFL* ですか？ あんなのは子供だましですよ。あんなのが生活基盤になるなんて俺はごめんです。」

Ryo は完全に喧嘩腰になっている。しかし、今度は *Ryo* の方が筋が通っている。*DFL* に *NFL* の代わりができるとはとても思えない。

「あの、その *DFL* というのはいったいなんなんですか？」

「ああ、明子ちゃんは知らなかったっけ。 *DFL* っていうのは、デジタル・ファイバー・リンクのことで、ニュートリノ・フィールド・リンクが開発されるまでの約 30 年間使用されていた通信技術のことなんだ。もっとも、通信速度は今の *NFL* の 500 分の 1 だから、とても現在の情報量では使い物にならないだろうね。」

「高橋少佐、ここから先は情報部の権限を越えた話だと思って欲しい。どうするか判断は君に任すが、地球やその他の一般市民のことを考えているのだったら、私の話しをとりあえず聞いてくれ。」

いい加減 *Ryo* の喧嘩腰の態度に、和岐さんの口調も荒くなる。それでも、喋り方がまだ丁寧だけに、かえってその方が恐かったりする。

「まず、市瀬中尉の問題だ。彼女を泳がせてカルーンの正体を突き止めるというのは、情報部での方針だったはずだ。現実にはカルーンの本部がどこに存在するのか、我々はまだ分かっていない。だとしたら、彼女に我々が疑っていることを悟られるのはまずいんだ。」

「しかし…。」

「グレン大佐には私から話しをしておくよ。」

「はあ…。」

和岐さんは *Ryo* の反論など初めから聞く気がないという態度で、強引に話しを終わらせてしまう。

「次に *NFL* の代わりがないということだが、もういい加減完成してもいい頃だと思うが…。」

今度は矛先がこっちに向いてきた。ここで和岐さんが言っている完成するはずの物とは、当然 *POWLA-KNIGHT* を差しているのだ。実は本体だけならとっくに完成しているというのに、*NFL* の代わりとなる通信技術がなかなか完成しないために使えなかったりする。原因はシモさんがこっちに帰ってこないせいなんだけど…。

「ですから、先ほども言いましたとおり、*NFL* に代わる物については構想すらない状態なんです。」

「では、*NFL* に代わる物さえこっちで用意できれば、すぐにも *POWLA-KNIGHT* は完成するというんだな。」

「え…？」

いつのまにかハスラムが部屋の入口に立っていた。いつ入ってきたのかまったく気がつかなかった。

それは *Ryo* も同じだったのか、かなり恐い顔をしてハスラムを凝視している。

「*NFL* のインターフェースは、もう改良の余地が残されていない究極の形を取っていると言える。根底から考え方を変えない限り難しいだろう。」

「見つかったのか？」

「ええ、ヒントとなる物は見つけました。詳細は下村室長に確認を取ってみたいとなんとも言えませんがね。」

「では、その件は下村室長に確認を取ってからにしよう。他には？」

そう言って和岐さんは話しを打ち切ってしまう。なんだかわざと打ち切ったようにも見える。かなり強引だったが、何か考えがあつてのことなんだろうと仕方なしに黙って頷く。

Ryo はまだ何か言いたいようだったが、とりあえず反論するのは諦めたようだ。黙ってペンを胸に差して立ち上がる。

「では、続きはまた来週。」

無然とした表情のまま、*Ryo* は部屋から出ていってしまう。まあ、今日の進行からすれば当然だろうな。

「じゃあ、私たちも…。」

そう言って立ち上がったところで、和岐さんが手で制止する。

紙に書かれたメッセージには、大きな字で「あとで部屋に來い。」と書かれている。

こんなことをするというからには、たぶん情報部には流れてはまずい内容の物でもあるんだろう。私は黙って頷いた。

「それじゃあ、失礼します。」

明子ちゃんは何食わぬ顔で出ていく。私も慌ててその後を追った。

第一章 「会議記事録」

H6. 24. MAR

第二章 「ファズアース効果」

「何でしょうか？」

私は和岐さんの個室に来ていた。そういえば、和岐さんの新しい部屋に入ったのは初めてのような気がする。

「木星から戻ってきて慌てて借りたもんだから、まだ何も揃っていないが、まあ適当に座ってくれ。」

和岐さんは畳の上に本当に適当に散らばっている座布団を差すと、そのまま奥へ引っ込んでしまった。

壁には1枚の写真が貼ってある。麦わら帽子をかぶって、もう一人の男の子と並んでいる。背景のオレンジの木からすると、たぶん木星だろう。

「紅茶なんだが、ミルクとレモンとどっちがいいかな？」

「どちらでも。でも、できたらミルクをお願いします。」

「了解！」

ほどなくして、和岐さんはティサーバとカップを2脚運んでくる。えーっと、この香りはまさか…。

「和岐さん、このお茶はひょっとして？」

「もう気がつかれたか、君なら香りだけで分かるとは思っていたが。」

この香りはキャティでのみ成育していた紅茶で、地球ではどうやっても育たなかったはず。

「木星でオレンジを作っていた時に道楽で作り始めたんだが、意外にもキャティでも地球でも駄目だったものが、どういう訳だか木星では育つんだよ。」

そう、なぜか MR-7星の爆発以降、原産地のキャティでも育たなくなり、もう二度とこのお茶を飲むことはないと思っていた。

「でも、まさかこのお茶を私に飲ませるためだけに、わざわざここに呼んだ訳ではないですよね。」

「もちろん、そんなことのために呼びつけたわけじゃない。」

和岐さんは苦笑いしながら、本棚から分厚いファイルを1冊取り出す。

「指田くんはファズアースについてどの程度知っている？」

「ええーと、彗星でないという程度にしか聞いてませんが。」

またいきなり話しが飛ぶもんだ。どうも和岐さんと話しをしていると話題がよく飛ぶが、今日は何が言いたいかまるで分からない。

「これは盗み聞きなんだが、どうも文化部室長、彼が行ったらしいんだ。」

「例の行方不明の間ですか？」

「例の…と言われても、その頃はまだ私はここに戻っていなかったけど。で、どうやらソルトリバー氏が1枚かんでいるらしいんだが、そこで重大なことを見てきたという話なんだ。」

「重大なこと？」

「地球の将来を左右するような重大事項だ。もちろん、カルーンも早速動いていたようだがね。」

そう言ってニヤリと笑うと、ファイルを私に差し出す。

ファイルにはファズアースについてと、そこで会ったリアムという住民について、ファズアース上でのみ起きる特殊な特性について…、いろいろなことについて事細かにレポートされている。

「何か気がつかないか？」

「べつに、特に気がついたものはありませんけど、この中にその重大なことっていうのも入っているんですか？」

「ファズアースの特性についてよく考えてみてくれ。具体的な希望が現実に影響するんだぞ。」

「しかし、ファズアース上でのみと書いてあるじゃないですか。これが、もし地球上で起きるといふのであればまだしも…。」

「ファズアースが地球に大接近する時を考えてみてくれ。地球はファズアースの圏内に入ることになる。地球人の無意識の希望が無秩序に叶うことになったら、この世界は大混乱になるんだ。」
佛木が失踪中にどこで何をしていたかは、本人から直接聞いているのである程度は知っていた。一応、本人に口止めをされているので、適当な相槌を打つしかないんだけど、私は和岐さんが言うような状況は考えたこともなかった。

しかし、こんなことを私に話したところで、どうにかなるものでもないと思うんだが。どっちかという、そっちの方がよく分からない。わざわざ *Ryo* に隠れて呼びつけるから、*POWLA* の新しい情報でもくれるのかと思ったのに。

「ところで、それが *POWLA* とどう結びつくのでしょうか？」

「まあ、そう話しをそんなに急がせないでくれ。」

和岐さんはもう1冊のファイルを取り出して、私に差し出す。

「考えてもみたまえ。カルーンの目的は *POWLA* を動かなくすることだ。無意識にしろ、ファズアースの圏内に入ったら、それが現実に影響するんだぞ。ましてや、カルーンはファズアースに行っている可能性もある。この特性について彼等が気がついていたらとすれば、必ず利用するに違いないと思わないか？」

「では、現在の *POWLA* のトラブルはファズアース特性によるものと考えているんですか？」

「なぜトラブルがないはずの *NFL* に原因不明のトラブルが起きるんだ？ そう考えれば、つじつまは非常に合うことになる。」

「しかし…。」

確かにそう都合よく考えていいならば、そう考えられないこともないだろう。しかし、原因不明のトラブルをそんな風に片付けていいものだろうか、ちょっと疑問が残るところでもある。

「*POWLA-KNIGHT* は既存の *NFL* を使用する。」

「だったら、なぜそれを会議で言わなかったんですか？」

「今回の *POWLA-KNIGHT* の件については、情報部と経済部がそれぞれかなりの圧力をかけてきているんだ。その中でも情報部は独自の組織構成で、いろいろと抜け道を作ってくる。情報の流出は防ぐことはできないだろう。一応、手は打ってあるが、既に *POWLA-KNIGHT* の件は相手に筒抜けだと思ふ。だとしたら、我々は情報の扱いを慎重に行なわなければならないんだ。高橋少佐には悪いが、彼には囨になって貰う。」

「和岐さん…、悪ですねえ。」

だんだん和岐さんの言わんとしていることが分かってきた。しかし、ファズアース効果については、まだ納得がいかない。

「しかし、*NFL* を使うことは、まだ納得がいかないんですが。」

「では、証拠を見せればいいかな？」

「はあ、どうやって…？」

「そこに *POWLA-SEC* がある。それで何でもいい、*POWLA-TWIN* とアクセスしてみてくれ。」
言われるままにポータブル型の *POWLA-SEC* のキーを叩いて *POWLA-TWIN* を呼出す。誰かが *POWLA-TWIN* を専有しているのか、極端にアクセス状況が悪い。

「つながりましたが…。」

「これでエラーが出る。」

和岐さんが言い終わらないうちに、*POWLA-SEC* の画面に現れる *NFL* エラーの文字…。

「どうして、こんなメッセージが出るはずは…。」

「ファズアース効果を使うと可能なんだよ。」

画面は数秒で復帰し、私はすぐに *POWLA-TWIN* のオペレーターを呼び出す。

ほどなく応答してきたのは明子ちゃんだった。キーボードを叩いて、*NFL* エラーが出たことを告げると、*POWLA-TWIN* 側では何も出てないとの返事が返ってくる。

「その *POWLA-SEC* が信用できなければ、他の *POWLA* 端末機でやってみても構わない。」

「いえ、それは結構です。和岐さんがこんなことで私を騙すとは思えませんから。」

「それはありがたいな。」

和岐さんの苦笑い…。最近、この和岐さんのこの笑顔に騙されているような気がしてならない。まあ、昔からか…。

「つまり、現在の *NFL* のトラブルは、*POWLA* 側の問題ではなく、ファズアース効果を使った *CAROON* 側の妨害工作なんだ。」

「分かりました。*POWLA-KNIGHT* でも *NFL* を使用する方向で検討します。」

「ああ、そうしてくれ。」

あれっ、でも、そういうってことは…？

「でも、そうすると、ファズアースはかなり接近してきているんですか？最近、ニュースパックでも何も流さないのだから分からないんですけど。」

「いや、もう遠ざかっているよ。高橋少佐がそう願ったからね。」

「は…、では今のは？」

「高橋少佐がリアムにそう望んだ時、私も一つ希望をしたんだ。いつでもどこでもファズアースに依存することなく、自由にファズアース効果を使用したいと…。」

いやはや、なんとも…。こんな時いったい何と言ったらいいのか、いつも困ってしまう。

しかし、*NFL* の問題がなくなったとなれば、*POWLA-KNIGHT* の完成を妨げるものは、まずなくなると言っている。いや、明日にでも稼働させることが可能だろう。

「分かりました。シモさんと連絡が取れ次第、明日から *POWLA-KNIGHT* の試験稼働を開始します。」

「ああ、*POWLA-TWIN* がいつダウンしてもいいように準備だけはしておいてくれ。」

「はい、了解しました。」

第二章 「ファズアース効果」

第三章 「市瀬中尉」

「調子はどうですかあ？」

数週間振りに復帰した佛木が、珍しく私の研究室に遊びに来ていた。

「とりあえず、ここ10日間ほど動かしてみてるけど、とくに問題は出てないようだね。」

「*POWLA-TWIN*も動かしたままなんでしょう？」

「ほとんど、市瀬中尉の専用と化しているようだけどね。」

私は定時モニターを何事もなく終えると、やっと佛木の方に向き直った。

「そう言うところを見ると、まだ業務のほとんどを明子ちゃんに任せたまなんだ。」

「局長にはちゃんと許可を取ってのことだよ。」

佛木に初めて会ったのは研修所だったっけ、私の身体のことを知っても態度を変えなかった数少ない研修生の一人だった。あの頃は寮長の目を盗んで、よく2人で飲みあかしたな。

あの時は2人でよく話しをしたもんだ。たいがいはたわいもない莫迦話しだったけど、時には大真面目に人生について討論したこともある。進む道も主義も違っていたけど、少なくとも佛木が何を見て、何を感じているかは分かっているつもりだった。

しかし、最近は佛木が何を考えているのかまったく分からない。ちょうどキャティを見つけた頃からか、話しをする機会も減ってしまったし、なにより佛木が話しをしなくなってしまったのだ。

「何を考えているんだ？」

「やだなあ、それじゃ、まるで私が何か企んでいるみたいじゃないですか。何も考えていませんよ。」

「佛木、最近のお前の行動はちょっとおかしいよ。ライセンスの件にしたって、ファズアースの件にしても、文化部の室長としては行動が変だとしか言いようが…。」

「分かっているよ。心配しなくてもきちんとするって。」

「信じていいんだろうね。」

佛木は答える代わりに力強く頷いてみせる。

佛木がそう言う以上、信じて待つしかないだろう。これ以上は何も言うまい。

「また来るよ。これから研修所の寮に行かなくちゃならないし。」

「うん、寮長によろしく。」

「私はよろしくしたくないんですけどねえ。」

どういう経緯だかは知らないけど、佛木がああ寮長にこきつかわれているという噂だけは、私の耳にも入ってきていた。

私は笑いを噛み殺しながら、部屋を出ていく佛木に手を振ってみせた。佛木はそれを知って、わざと垂れながら部屋を出ていく。べつに、そんなに嫌がっているようにも見えないんだけどね。さてと、私もそろそろ文化部へ *POWLA-TWIN*の様子でも見に行ってくるか…。

私の研究所から文化部の部屋まで珍しく誰にも会わない。最近はこの人間も年々減ってしまって、随分と寂しくなってきた。それにしても、こうして歩いてみると分かるが、人気のない建物だなあ。

とても、この中に5つの部署があるとは思えない。

それでも、文化部だけは例外なのか、威勢のいい声が外まで響いてきていた。廊下がガランとしている分、余計に響くような気がする。

「ちょっと、いい加減にしなさいよ！」

アッと思った時には、顔に何か当たっていた。感触としてはノートか何かだと思う。

「きゃあ、指田せんぱい、ごめんなさい。」

慌てて明子ちゃんが駆け寄ってくる。

「いえ、べつにたいしたことじゃありませんから。それより、これはいったい何の騒ぎです？」

「え、そのう、何でもありませんから…。」

明らかに何かを隠しているような明子ちゃんの態度。部屋を見回すと、柴野さん、アリコちゃん、そして市瀬中尉がこっちを見ている。

ははーん、さては市瀬中尉と明子ちゃんが衝突したかな。

「とにかく、この惨状はちょっとひどいと思いませんか？」

部屋の中は、ファイルやノートなどの書類の類が、あたり一面に散らばっている。かなり派手にやったらしい。

「はい…。」

「では、まず部屋を片付けましょう。事情を聴くのはそれからです。」

私の言葉でまず動き出したのは柴野さん、その動きにつられるようにしてアリコちゃんも書類を拾い始める。明子ちゃんと市瀬中尉が最後まで睨み合っていたが、私が明子ちゃんを促すのと同時に2人ともノロノロと動き出す。

ほどなく部屋は元の落ち着きを取り戻し、私たちはテーブルを囲んでくつろいでいた。

「あ、お茶を入れますね。」

柴野さんがそう言って立ち上がりかけて、ふいに不思議そうな顔をする。

「そういえば、市瀬さんは？」

えっ…、そう言われてみれば、いつのまにか姿が見えなくなっている。

「ま、いいでしょ。その方が明子ちゃんも話しやすいでしょ。」

「ええ、まあ…。」

「じゃ、お茶は4人分でいいですね。」

「はい、お願いします。」

柴野さんが立った後をアリコちゃんが慌てて追いかける。

「どうしたんですか？明子ちゃんらしくもない。」

「つい、カッとしてしまって…。佛木せんぱいいたら復帰したっていうのに全然戻ってこないし。もう、あたし、どうしたらいいのか…。」

疲れているんだ。少し休ませないと、どこかで潰れてしまいかねない。

「はい、お茶が入りました。」

ティーカップに日本茶…？また面白い組合わせだ。

「あの、気にしないで下さいね。ちょうどこのカップしかなかったんです。」

「いえ、べつに何でもいいんですけど、ただちょっと気になったものですから。」

では、とりあえずお茶もきたことだし、ここは明子ちゃんの話しでもじっくりと聞いてみますか。

「佛木は1回もここには来ていないんですか？」

「いえ、謹慎が解けた日に1度だけ来て、もう少し任すって。」

「何をするのか言っていましたか？」

「修業の旅に出るって言っていましたけど、どこまで本当だか分かりません。」

修業ねえ…。まあ、あの寮長にこき使われているんだとしたら、修業と言えないこともないか。

「柴野さんは会ったの？」

「あたしはちょうどESP研の方に行っていましたので、あたしがある場にいれば、もう少しは聞き出したんですけど。」

柴野さんはそう言って、私に意味ありげにウインクしてよこす。

そういえば、どうして柴野さんが明子ちゃんのそばにいて何もしないんだろう？柴野さんなら明子ちゃんの悩みが、手に取るように分かるだろうに…。そこまで考えて、何かもっと深い理由があるような気がしてきた。

「まあ、どっちにしても佛木のことは仕方ないとして、問題は市瀬中尉です。何が原因なんですか？」

「あまりにも市瀬さんのオペレーションミスが多いので、マニュアルをもう一度読み直してほしいと言ったんです。」

「そうしたら、彼女は何と？」

「そしたら、あたしにはマニュアルなんて必要ないって…。」

「それだけであの騒ぎですか？」

とたんに柴野さんとアリコちゃんがお互いにめくばせし合う。

「リセットしたんです。」

「リセット…って、*POWLA-TWIN* をですか？よく、彼女がリセットの方法を知っていましたねえ。」

「あたしも同じことを言ったんです。そしたら…。」

「そしたら…？」

明子ちゃんが思い出したくないものを思い出したという顔をして、横を向いてしまう。

「だから、あたしはマニュアルなんて見なくても、何でも知っているんだ…って彼女が言うから…。」

言いにくそうにしている明子ちゃんに代わって、柴野さんがそのあとを続ける。

「で、明子ちゃんったら言っちゃったんです。じゃあ、そんなに知ってるんならなんでミスが多いのか。それとも、わざとミスしているのか…って。」

売り言葉に買い言葉って奴か…。ま、仕方ないか、*Ryo*にもあれだけいじめられているし、彼女にしたって我々が疑っていることくらいは気付いてるだろうし。

「気にしない、気にしない。いちいちそんなことで悩んでいたらハゲてしまいますよ。」

「ハゲ…。くま先輩！言っていいことと悪いことが…。」

「そうそう、それくらいの元気があった方が、明子ちゃんらしくていいと私は思いますけどね。」少しは目が生き返ったかな？あとは柴野さんがそばについているんだ。私が直接話しをするまでもないでしょう。

それにしても、市瀬中尉のことは至急情報部に伝えないと取り返しのつかないことになりかねないな。

「とにかく、文化部内のことは任せますから。みんな、明子ちゃんに期待してのことなんですから、頑張ってくださいよ。市瀬中尉の件は、私からうまく *Ryo* に話しておきますから、心配しなくてもいいです。」

「はい、分かりました。お願いします。」
明子ちゃんがやっと笑った。

第三章 「市瀬中尉」

H6. 24. MAR

第四章 「正式な辞令」

私は会議室に入ったとたんに、何かいつもと違う雰囲気があるのを感じていた。いつもなら、必ず誰よりも先に来ているはずの *Ryo* が来ていないのだ。

「おはよう、指田くん。今日は早いな。」

私のすぐ後ろから、和岐さんとハスラムが入ってくる。

「おはようございます。*Ryo* がまだ来ていないようなんですが、和岐さん何か聞いていませんか？」

「ああ、それについては全員揃ってから話しをするよ。とりあえず、今日は欠席だ。」

「はあ…。」

ハスラムは相変わらず無口だ。軽く頭だけ下げると、いつもの壁に寄りかかる。

和岐さんは何か難しい表情のまま腕組みをしている。いったい何があったというんだ？

ほどなくして、佛木と明子ちゃんとシモさんの3人が入ってくる。

「あれ、*Ryo* は？」

シモさんが会議室に入ってくるなり、私にそう訊ねる。

「なんか今日は欠席だそうです。理由は和岐さんに訊いて下さい。」

「ふーん。」

こころなしか明子ちゃんがホッとしているのがよく分かる。

「指田せんぱい、何がそんなにおかしいんですか？」

「いえ、べつに…。それにしても佛木が出席するなんて、どういった風の吹き回しなんだと思って。」

「室長の私が出席するのが、そんなにおかしいのか？」

「べつにおかしいとか、そういう意味で言ったんじゃないくて、どうして今日に限って急に出席する気になったのかって思っただけなんだから。」

「必要であれば、いつだって出席するよ、私は。」

…ということは、今まではきちんとした理由があって、明子ちゃんに代理をさせていたことになる。今日、この場に出てきたということは、その理由もはっきりさせてくれるのだろうか。

「では、そろそろ本日の会議を始めたいと思う。」

和岐さんの言葉で、みんながそれぞれの席についた。

「最初に断っておきたいんだが、本日高橋少佐は怪我のため欠席するとの連絡があった。」

「何があったんですか？」

「おそらくカルーンに襲われたんだろう。現在、ステーションVRに収容されているようだ。」

「怪我はひどいんですか？」

「いや、本人が直接連絡してきたくらいだから、たいしたことはないと思う。しかし、足の骨を折っているらしいから、暫く動くことは無理だな。」

足の骨を折るなんて、*Ryo* にしてはとんだドジをしたもんだ。まあ、あとで暇ができたらからかいにでも行ってみますか

「では、本題に入ろう。*POWLA-KNIGHT* の試験稼働も順調のようだが、我々はさらに次の段階を考えたいと思う。」

「次の段階…？」

「*POWLA-KNIGHT* の結果はたいへん喜ばしいものだが、これで満足して貰っては困る。まだ、

NFL に代わる物については開発が始まったばかりだし、AVITASION についても未知数的な部分が多いのが現状だ。しかし、君たちには次の段階に進んでほしい。つまり、第 2 世代の POWLA の開発をしていく必要があるということだ。」

私と明子ちゃんとおもわず顔を見合せてしまう。それとは対称的にシモさんと佛木は難しい顔をしている。ハスラムは相変わらず無表情のままだ。

「実は正式に本部の方から打診があったんだが、ロンドンの科学部では 2 代目の POWLA の設計に入ったようだ。POWLA-PICO も POWLA-TWIN も所詮 POWLA の端末機でしかなかった。POWLA-KNIGHT になってやっと POWLA と同等の機能は持ち出したものの、問題がない訳ではない。我々が将来に期待しているのは、POWLA に完全にとって代われるグランドコンピューターなんだ。」

「新しい POWLA の必要性は認めます。しかし、それを現在の体制で行なうのには無理がありませんか？事実、POWLA-KNIGHT の時でさえ、私が数ヶ月間かかりっきりになっていましたから。」もし、シモさんが作った ALTO-KNIGHT という原型がなかったら、数ヶ月なんてオーダーでできたかどうか分からない。おそらく何年…のオーダーだったと思う。それがグランドコンピューターとなればいったい何年かかるのか、とても考えたくない。

「もちろん、指田くんが言うことはもっともだと私も思う。そこで、私は専門の部門を置こうと考えているんだ。それが今日の議題の一つでもある。」

和岐さんがシモさんに視線で合図を送ると、シモさんは大きく頷いて立ち上がる。

「では、そのあとは僕の方から説明しましょう。」

佛木が持ってきた書類を全員に配る。A 4 版にして 3 頁くらいの簡単なものだ。

「早く言えば、既存の POWLA システムは完全に使用しなくなります。今までの POWLA のコンセプトとはまったく違う物になると思って下さい。その一つとして、今度の POWLA には端末機という物がなくなります。」

「それは最初は設置しないという意味ですか？」

「いや、POWLA II には…、新しい POWLA をそう呼びますが、端末機という概念その物がなくなります。したがって、現在の POWLA 端末機のすべては POWLA II 本体の一部と置き換えられることになります。」

確かに手元のプリントを見る限り、POWLA II に端末機の必要性はないように見える。しかし、それがいったいどういう意味を持つのか、私には想像もつかない。

「セキュリティについてはどうなっているんですか？POWLA が本体と端末機を分けた理由の一つがセキュリティ機能の強化だったと記憶しているのですが。」

「その点は大丈夫。POWLA II は POWLA よりセキュリティ機能は強化されているから。」

「うーん、全然分からない。」

「まあ、POWLA II の詳しい仕様についてはあとでゆっくり話しして貰うこととして、さっき言った専門の部門についての話しを少し説明しよう。」

和岐さんが少し苦笑いをしながら、私の質問を遮った。どうやら、私がこうやってシモさんにいろいろと突っ込むことを予想していたようだった。

「ロンドンの科学部で作っている物がどういう物かは知らないが、私はこの信州で開発する POWLA II が最上の物と確信している。という訳で、開発環境もそれなりの物を用意したいと考え

ているんだ。」

「和岐さん、焦らさないではっきり言って下さい。」

「分かった、分かった。では、はっきり言おう。下村さんと佛木さんの2人には、今度新しく設立する *POWLA* 研究所で *POWLA II* の開発に専念して貰うことになった。」

「えーっ！」

叫んだのは明子ちゃん。気持ちは痛いほどよく分かる。私も一瞬、同じことをしそうになったから…。

「湯浅中尉、何か？」

「いえ、佛木せんぱいが文化部からいなくなったら、誰が室長の仕事を引き継ぐのかと思ひまして。」

明子ちゃんが助けを求めるような視線を私に向ける。

「まさか、初めからそのつもりで、私と湯浅中尉をこの会議に出席させていたんですか？」

「まあ、そういうことになるかな。しかし、これはもともと局長の発案なんだ。どっちにしたって、室長の交代は考えていたようだからねえ。」

これは私にというより、明子ちゃんに向けてという感じ…。まあ、ここでいくら反対しようが、いずれ局長から正式な辞令が出てしまえばどうしようもないだろう。

「という訳で、この会議は今日で最後にしたいと思う。以後の開催は *POWLA* 研究所の主催となる。」

和岐さん、みんなの顔を見回した後、深々と頭を下げた。

「和岐さん、頭を下げるのはことが全部終わってからにしませんか。確かに *POWLA* については、これで一区切りがついたと思いますが、カルーンの妨害工作がなくなった訳ではないんですよ。」
これで *POWLA-KNIGHT* や *POWLA II* への妨害が行なわれれば、結局のところ *POWLA-TWIN* の二の舞になりかねない。いくらセキュリティ機能を強化したところで、カルーンの技術力も相当なものだ。すぐにたちごっこになるのが目に見えている。

「そこで、本日2つ目の議題に話しを移そう。」

和岐さんは私からのこの質問を待っていたかのようにニヤッと笑うと、壁に寄りかかっているハスラムに合図を送る。

「では、私から報告しよう。」

これまでこの会議中は絶対に壁から離れようとしなかったハスラムが、初めて壁から離れた。

「カルーンの本拠地はもう調べがついている。今頃は治安局が乗り込んでいるはずだ。」

「やっぱり *CAPERA* の人間が絡んでいた訳？」

「絡んでいたも何も、カルーンは *CAPERA* 本社内に在ったんだ。今回ばかりは逃げ切れないだろう。」

「へえ…。」

意外…というか、予想はついてはいたけど、よくそんなことが調べられたものだ。しかしカルーンが *CAPERA* 本社内に在ったという事実より、それを調べてきたということの方がむしろ意外か…。

「あのお…。」

「ん…？」

「彼女…市瀬中尉は、やっぱりスパイだったんですか？」

明子ちゃんが恐る恐るといった感じで、ハスラムに訊ねる。

そう、それはどうしても気になるところだろう。今回の *POWLA* に関する事件は、そもそも彼女が信州に来たことから始まったと言っても過言じゃない。

「市瀬中尉はスパイだ。」

ハスラムは言葉短くそれだけ言うと、再びいつもの壁に戻る。

「そういうことだ。これですべての結末がついたな。私の役目も終わりに近いということだ。」
確かに一応の結末はついたと思う。*CAPER*A は解体され、ファズアースは太陽系から遠ざかり、*POWLA* は新しい方向性を見出した。しかし、これですべてが元に戻る訳ではない。

「みんな、ご苦労だった。これにて解散する。今後のことは各自、部門長より指示があるだろう。ありがとう。」

和岐さんは軽く頭を下げると部屋を出ていった。ハスラムもその後を追って出ていく。

なんか急に虚脱感が襲ってきた。まだすべてが終わった訳ではないというのに、あらゆる方向性が見えてきたということで気が抜けてきてしまった。本当はこれからが忙しいというのに。

しかし、たかだか1ヶ月の間にいろいろなことが同時に起きたような気がする。その中には今回のようにうまくいった物もあれば、元に戻らない物もあった。そう、元に戻らないものに、大切な友人がある。

あっ、そう言われれば思い出した。いつのまにか1ヶ月経ったんだ。

「佛木、今日このあとの予定はどうなっているんだ？」

「いや、とくに何も無いけど、なんだ？」

「なんだってことのもんでもないけど、もしあいているのなら一緒に飲まないかなと思って。」

「それって、どういう意味で？」

「今日はたちやんの命日だからね。だからって何かできる訳じゃないんだけど、せめて一緒に酒でも飲んでやろうかと思ったんだけど。」

「そうか、もう1ヵ月か…。そういうことなら喜んで。」

ずっと不機嫌そうだった顔がやっと笑った。

第四章 「正式な辞令」

H6. 24. MAR

第五章 「*POWLA*のウイルス」

「指田せんぱい！指田せんぱいはいらっしゃいますかあ。」

あれはアリコちゃんの声だ。いったい何があったというんだろう。部屋の中にいた連中が、一斉にその手を休めて私の方を見る。

「ほうら、アリコちゃんの“*POWLA*が停まっちゃったんです。” っるのが始まった。」

誰かが冗談まじりにアリコちゃんの口真似をして周囲の者を笑わせている。

しかし、*CAPER*A システムが切り離されている現在、*POWLA* そのものが停止することなどありえないはずだ。

「あ、指田せんぱい、すぐに来て下さい。*POWLA-KNIGHT*が動かないんです。」

「動かない…と言うと？」

「パワーは入っていると思うんですが、ウンともスンとも言わないんです。」

「そんなはずは…。」

「なくてもあっても、とにかく動かないんです。すぐに私と一緒に来て下さい。」

そりゃあ、アリコちゃんの言い分の方がもっともだ。私は読みかけの資料をその場に置くと立ち上がった。念のために *POWLA* システム用バックアップディスクを持った。

「いつ頃からおかしいんですか？」

「おかしいのに気がついたのは、ついさっきです。ステーション側で小さいエラーが発生したんで、*POWLA-KNIGHT*側でリセットをしたんです。そしたら、そのまま動かなくなっちゃったんです。」そんなことで簡単に停止するというのは、ちょっと解せない。どうも意外と単純なトラブルではないという予感が走る。

階段を駆け登り、文化部の *POWLA-KNIGHT*の前にやってくる。確かに状態としてはアリコちゃんの言う通りに、パワーは入っているもののモニターに何も映っていない。

「直りますか？」

「やってみないと何とも言えないけど、念のために室長をここに呼んで下さい。」

「湯浅室長は本局にいますから、ここに来るまでにはちょっと時間がかかりますけど、それでもいいですか？」

「それでも結構です。最悪のケースでは *POWLA-TWIN*に戻すことも考えなくてはなりませんから。」

「はい、分かりました。」

私の *POWLA-TWIN*に戻すという言葉に反応して、アリコちゃんは慌てて出ていく。

もし最悪のケースになって、*POWLA* システムの変更ともなれば、科学部、文化部両室長のサインと局長の許可が必要になってくる。つまり、私と明子ちゃんが揃っていなくては *POWLA-TWIN*へ戻すことができないという訳だ。

アリコちゃんが戻ってくるまでにやれることはやっておかないと。とりあえず、まずは型通りにリセットを試みる。しかし、何も立ち上がってこない。次にローカルモードに切り替えて、再びリセット。待つこと 30 秒…、ウンともスンとも言わない。

仕方がない。念のために持ってきたバックアップディスクを立ち上げてみるか。

ドライブに入れたディスクが規則的な音を奏でる。…と、今度は何事もなかったかの様にシステム

が立ち上がる。

うーん、まさか…。

「どうだ…？」

突然、背中から声をかけられる。

「あ、和岐さん。どうも真剣に *POWLA-TWIN* に戻すことを考えた方がよさそうです。」

「原因は？」

「まだはっきりとは言えませんが、ひょっとするとウィルスの可能性があります。」

POWLA のセキュリティの高さは、他のコンピューターシステムの追従を許さないほどになっている。従って、*POWLA* システムに忍び込むことは、下手をするとその設計者でも難しいくらいだった。もちろん、それは *POWLA-KNIGHT* 単体についても同じことが言える。

「*POWLA-TWIN* に戻したとして、二次感染の可能性はないのか？」

「至急、調査します。」

「分かった。局長には私から報告しておくよ。指田くんは、早急に原因について追及してくれ。*POWLA* システムは、これより 24 時間、使用禁止とする。」

「はい。」

前代未聞の出来事になってしまった。*POWLA* が全面ストップするのは、実に *POWLA* 史上初めてのことになるはずだった。

POWLA-KNIGHT からバックアップディスクを抜き出す。私の予想が間違っていなければ、こいつにもウィルスが感染しているはずだ。こいつを持ち帰って調べるのが、一番てっとりばやいだらう。

POWLA-KNIGHT の電源を落としてしまう。ひょっとすると歴代の端末機の中でも一番短命だったかもしれない。さすがに自分が一番関わった *POWLA* だけに少しショックでもある。

しかし、そんな感傷に浸っている暇もないな。和岐さんは 24 時間停止すると言ったんだ。すなわち、私は 24 時間以内に原因を突き止め、かつ対策を立てなくてはならない訳だ。

とりあえず研究室に戻ろう。幸いにも研究室にはまだ *ALTO-KNIGHT* が残っている。まずはあれを使ってテストをするしかないだらう。

ちょうど戻ってきたアリコちゃんを入れ違いに文化部を出ていく。

「話しは和岐から聞いたよ。何か手伝えることがあったら、何でも言ってくれ。」

研究室には既にハスラムが来ていて、私にそう言った。彼は珍しくその長い髪の毛を後ろに束ねていた。

「見当はついているのか？」

「おそらく *POWLA* にウィルスが紛れているんだと思う。」

ハスラムに説明しながらテストベンチのパワーを入れていく。*POWLA-KNIGHT* を開発する時に使っていた奴だ。現在は *ALTO-KNIGHT* がつながっている。ここなら解析が容易にできる。

「このディスクを解析しますから、アナライザーの方をチェックして貰えますか？」

テストベンチにディスクを入れて、*ALTO-KNIGHT* を立ち上げる。何事もなかったようにシステムが立ち上がる。

「そっちのモニターに赤い記号がいくつか出るはずなんですけど…。」

「いや、何も出ない。」

「そんなはずは…。」

私の推測が間違っているのだろうか？操作してみる範囲ではまったく普通の *POWLA* だった。

「一度リセットしたらどうなるかな？*POWLA-KNIGHT* はリセットした直後におかしくなったんだろ？」

私のそんな心の内を察したのか、ハスラムがそう提案してきた。まあ、ここは言われた通りにするのが一番妥当だろう。

「そうですね。」

リセットスイッチに手を伸ばす。テストベンチ用にリセットスイッチを付けてあるので、本物の様にコマンドリセットでない分、少しは簡単になっている。

「あ…。」

今度はさっきと違って、ウンともスンとも言わない。

「症状が出たようだな。」

もしかして…、何か心に引っ掛かるものを感じて、もう一度リセットをする。心の中でゆっくり 30 秒を数えて、やっぱり立ち上がらないことを確認する。

「今度は電源を落としてみます。よく見ていて下さい。」

テストベンチのメインパワーをすべて OFF にしてから、少し時間をおいて再びすべてのパワーを ON にする。

やっぱり…、さっき感じた通りのイメージで *POWLA* は立ち上がった。

「これはどういうことだ？」

「つまり、電源から立ち上げた場合には、このウィルスは働かないんです。ところがリセットした場合にはこの通り…。」

いま立ち上がったばかりの *POWLA* をリセットしてみる。思ったとおりに今度はウンともスンとも言わない。

「…というようにウィルスが働いて、*POWLA* の動きを抑制してしまうみたいですね。」

「では、リセットさえしなければ *POWLA* を使うことは可能ということだ。」

「もっと詳しく調べてみないとはいっきりとは言えませんが、おそらく使用することには支障ないでしょう。しかし…。」

しかし、一日に何回となくリセット動作をしなければならない *POWLA-KNIGHT* にとって、リセットできないということは使用できると言えるかどうかは、はなはだ疑問ではあるが…。

「今後の対策については、直接局長に判断して貰うしかないだろうな。」

「そうですね。」

いったいワクチンを作るのにどのくらいの時間がかかるのか…。まさかとは思うけど、*CAPERA* の助けを借りるようなことにならなければいいけど。まあ、もしその方が被害が少ないとなれば仕方がないが。しかし、このウィルスの発生源が *CAPERA* だとすれば、敵の思惑にはまるのもしゃくな気がする。

ハスラムと何か話す訳でもなく、それでも何かできる訳でなく、自分の目の前にある物のあまりの事の重大さに途方に促していた。

その静けさを打ち破るように、突然明子ちゃんが部屋に飛込んできた。

「指田せんぱい、*POWLA* はどうなんですか？」

「ああ、ご苦労様。どうにもこうにも *POWLA-KNIGHT* は使えそうにないよ。」

「そんなに悪いんですか？」

「ああ、かなりたちが悪いね。ちょうどいい、私と一緒に局長の所に行きましょうか。」

「え…？」

「え…じゃないでしょ。何のために明子ちゃんを呼んだと思っているんですか？」

「え…、アリコちゃんが、*POWLA* が変だからすぐ戻ってきてくれって言うから…、違うんですか？」

「いや、違わない。」

ま、仕方がないか…、あのアリコちゃんじゃ…。

「話しは歩きながらするとして、とりあえず局長室へ行きましょう。」

「はあ…。」

ハスラムを促して部屋を出る。道々、ハスラムがこれまでの経緯を明子ちゃんに説明してくれる。局長室の前でちょうど話しを聞き終えた明子ちゃんは、信じられないといった表情で一瞬私のことを睨み付ける。

「言っておきますけど、私のせいではありませんからね。」

「分かっています。でも…。」

でも…と言いながら、それでもまだ私を睨み付けたままだ。まあ、好きにしてください。それで明子ちゃんの気がすむならね。

いつもの癖で深く大きく深呼吸をする。少し間を取ってドアをノックする。

「指田ほか2名、入ります。」

「入りたまえ。」

相変わらず苦虫を潰したような顔をしている。隣に和岐さんも来ている。ということは、もう局長には半分以上話しが伝わっているということだ。

「*POWLA-KNIGHT* の方はどうだ？」

「正直言って、かなり難しい状況です。」

「いま *POWLA-TWIN* に戻して大丈夫なのか？」

「100%の確率で感染すると考えられます。」

「では、どうするつもりなんだ？」

ここでちょっと和岐さんの顔を見る。ふと考えついたことがあるのだが、それには和岐さんの協力がないと難しかった。

「*POWLA-WIN* は使えませんか？」

「*POWLA-WIN*…？」

和岐さんはびっくりした表情を作って、慌てて普通の顔に戻してしまう。その間、局長は面白そうに和岐さんの顔を眺めている。

「そういえば以前も出てきたけど、*POWLA-WIN* って何ですか？」

POWLA-WIN を知らない明子ちゃんだけが、訳が分からないという顔つきで質問してきた。

「湯浅中尉にはウインダムと言った方が分かりやすいかもしれませんが。」

「えーっ、だってあのウインダムは…。」

みんなは一斉に和岐さんを見る。ウインダムは和岐さんが連邦委員長の座を降りた時に、*POWLA*

とのオンラインを外し、木星に連れていったところまでは知っている。しかし、帰ってきた和岐さんは、ウインダムを連れていないのだ。木星に置いてきたのか、どうしたのか…。

まあ、私がここで *POWLA-WIN* と言ったものは、正確に言えばウインダムだけを指すわけではなく、あの連邦委員長のプライベートルームにあったデスク全体を指している。あれなら基本的に *POWLA-KNIGHT* 並みの機能を持っているはずだし、たぶんすぐにでも使えるんじゃないかなと思っている。

そういえば、*POWLA-WIN* の設計者は和岐さん自身だと聞いたことがある。意外と *POWLA* については私より詳しいのかもしれない。

「まあ、ウインダムのことは置いておくとして、*POWLA-WIN* か…、使えないことはないと思うが。どうですかね、使えますか？」

この和岐さんが使えますかねと聞いたのは、局長に対して。一応、和岐さんは局付きの扱いになっているので、以前のように簡単に本部局の建物に入るわけにはいかない。

「本部局には私から連絡を入れておこう。それで、どれくらいの時間を稼げばいいんだ？」

局長にも和岐さんにもまだ詳しい対応策を話した訳でもないのに、いかにも私がこれから話す内容を知っているかのように返事をしている。

「24時間、私に下さい。その間に必ずワクチンを作ってみせます。」

「よろしい。では、あとは任せたぞ。」

「はい。」

第五章 「POWLA のウイルス」

H6. 24. MAR

第六章 「八方塞がり」

どうせ一度オンラインしてしまえば感染してしまうのである。無理に発病を抑えるより、発病してもシステム全体を生かせる方法を取った方がいいに決まっている。とにかく今はワクチンを作るだけの時間が稼ぎたかったのだ。

私の考えは質より量だった。*POWLA-KNIGHT* がリセット動作に入ったところで、ホストマシンを *POWLA-TWIN* に移してしまう。今度は *POWLA-TWIN* がリセット動作に入ったら、*POWLA-PICO* にホストを移す。そして、*POWLA-PICO* がリセット動作に入る頃には、最初の *POWLA-KNIGHT* を立ち上げ直しているはずなので、またホストを *POWLA-KNIGHT* に戻す。こうして3台の *POWLA* 端末を使って、1台分の働きをさせようという訳である。*POWLA-WIN* は、もし3台でも間に合わなくなった場合を考えてのバックアップだ。

「よお、なんか大変なことになっているな。」

昨日からずっと研究室にこもっている私の所に、久しぶりに *Ryo* が姿を見せた。傷はもうよくなったのか、べつに痛そうな素振りも見せない。

「怪我はどんな具合なんだ？」

「まあ、完治とは言えないが…。」

Ryo は私の横に椅子を持ってくると、座りながら一束の書類を私の膝の上に置く。

「役に立つかどうかは分らんが、こんなものを持ってくるくらいの元気は出たところだな。」

「これは…？」

モニター画面からちょっと目を離して、*Ryo* の持ってきた書類を手取る。表紙には大きい文字で「P-S-E-T」とだけ書かれている。

ページをめくると、中とはあるプログラムの仕様書になっていた。しかも親切なことに後ろにはそのソースリストまで添付されている。

「まさか、これはこいつの…。」

「お前が早くなるとかしてくれんことには、俺の仕事に支障が出るんだよ。」

正直言って、局長には24時間以内にワクチンを作ると言ったものの、実際には作れる自信なんてこれっぽちもなかった。しかし、ソースリストが手に入ったらなれば話しは変わる。これならかなりの時間短縮になる。

「じゃあな、あとは任せたからな。」

「任せた…って、*Ryo*、どこに行くんだ？」

「ファズアースの様子が変なんでな。ちょっと調べてくる。」

「ファズアースが…？」

ファズアースと言えば、和岐さんの希望通りに太陽系よりかなりの位置まで遠ざかっていたはずだ。たとえ今ファズアースに何か異変があったとしても、今の位置からでは地球に影響が出るとは思えない。もし可能性があるとするれば、まだキャティの方が考えられる。

「キャティに何かあったのか？」

「ほう、なかなかいい勘していると…言いたいところだが、今回は外れだ。心配せんでもキャティにも何も影響はない。もっとも、お前が早くそのワクチンを作ってくれんことには、向こうと連絡

が取れないので本当に大丈夫かどうかは分からんがな。」

「じゃあ、問題は本当にファズアースの方か。ファズアースがどうしたっていうんだ？」

「どういうわけだか、このくそ忙しい時に太陽系に戻ってきちまったんだよ。今ここでファズアースに接近されたら、それこそ POWLA はアウトだ。なんとしても地球に接近する前に POWLA を復旧させて貰わんと困るんだ。分かったら、早くワクチンを作ってくれ。」

ファズアースが地球に向かってきている？ いったい何で？ 何がファズアースで起きたんだ？

Ryo は私にそれ以上質問させる間を与えてくれなかった。相変わらず現れた時と同じくらいの唐突さで姿を消してしまっていた。

和岐さんと連絡を取りたいところだが、和岐さんは本部局の POWLA-WIN の前にはいるはず。ここからでは連絡の取りようがない。他の人の邪魔をするつもりもないし、そんなことをしている暇もない。

ええーい、結局この目の前のこいつをやっつけないことにはどうにもならんのか。

身動きのできない自分が腹立たしかった。キャティに初めて行った頃がなんとなく懐かしい。しかし、現実問題として、明子ちゃんも柴野さんも私がワクチンを完成させるのをじっと待ちながら POWLA の前に座っているはず。

POWLA…、お前はいったい…？

第六章 「八方塞がり」

『輝けるポーラの光』 —空翔ける羊飼いの群れシリーズ 4—

H6. 24. MAR